

(要約版)

## 熊野の葉巻文化と嗜好品からみる農村女性の労働と楽しみ

助成研究者 湯崎 真梨子(和歌山大学産学連携イノベーションセンター)

### 1. 研究目的

紀伊半島の熊野地域は、聖地熊野の神秘的なイメージをもちながらも、近年まで孤絶した貧しい山間僻地と語られてきた。海岸近くまで山が迫り、その山奥深くまで集落が点在しており、そこに暮らす熊野の女性たちは、急峻な山肌や狭隘な耕地で過酷な労働に明け暮れた。この熊野にはツバキの葉を煙管がわりにした独特の煙草が存在した。

本研究では、熊野地域を対象に、文献やインタビューにより熊野女性に独特の嗜好行動であった喫煙文化を調査し、喫煙の背景である女性の日常を明らかにする。同時に、嗜好品も拾い出し、生活の中から生まれた楽しみの実像を明らかにすることを目的とする。

### 2. 研究方法

本研究では、文献調査とインタビュー調査により、ツバキの葉を使った喫煙風習が熊野を中心としてどのように分布していたかを整理し、背景となった農山村女性の労働と生活の実態を記録した。インタビュー調査は、和歌山県熊野エリアの西牟婁地域、東牟婁地域を中心に実施。また、文献に現れた長崎県五島市現地でも実施した。調査データは、ツバキなどの葉による喫煙行動があった集落地点毎に地図上に整理し、その分布を視覚的に明らかにしながら、地域間の関連性を分析した。同時に農村の日常における嗜好品についても聞き取り調査を実施した。

ツバキの葉を使用した煙草は、葉を煙管代わりにしてきざみ煙草を巻き込んだものであるが、その他の葉を使用したものを含め、本研究では「柴巻」と表記した。

### 3. 研究成果および結果

柴巻について記録された古いものでは、寛政10年(1798年)の林信章の『熊野詣紀行』の中の一節がある。『紀伊続風土記』を編纂した加納諸平の歌集『柿園詠草』ほか、菊池元習、斎藤拙堂、堀内信らによる熊野山間地における見聞録など、これらの江戸末期から明治初期の文献からは、険しい山間の集落で口に柴巻を咥え、頭上に薪や行李を戴き運搬し立ち働く熊野の女性の姿がわかる。また、南方熊楠の『紀州俗伝』においても、頭に木板を乗せ柴巻を吸いながら山道を行く婦人の姿が描写されている。三重県で

は、佐藤春夫の民話集『山妖海異』の一節や三重県所蔵の「各郡習俗慣例取調書」の中に婦女子の喫煙習俗の記録を見ることができる。また井上円了は『日本周遊奇譚』に、ツバキ葉を用いた喫煙は、「紀伊の熊野地方と肥前の五島<sup>みいらく</sup>三非楽地方」を記している。

これらの文書に示される熊野の婦人たちの労働の特長として頭上運搬「いただき」があった。牛舎も通らない隘路を頭上に熊野山間の主産業である炭、杉や檜の皮、かづら、薪、製紙の材料である木枝、養蚕の繭玉、川の積み荷などを運ぶのである。漁村にあっては、大型の漁魚や米俵までを頭上に乗せてたくましく働いたとの記録がある。頭上運搬は大正時代には姿を消すが、荷物を背負い険しい山道に行く荷運びの「にもち」は女性の仕事として近年まで残った。女性たちは、農作業や山仕事、養蚕、牛の世話などに日常的に励みながら、「にもち」の重労働に励むなど厳しい労働に明け暮れた。

文献調査を裏づけ、かつ、現状調査を行うために、ツバキの葉を使用した柴巻の喫煙行動について、熊野エリア(西牟婁地域、東牟婁地域)の21集落および長崎県五島市三井楽地区、東京都の伊豆大島で聞き取り調査を行った。証言者(65才以上が中心)の祖父母の時代まで、すなわち明治生まれまでの習慣であり、喫煙経験者は存命していず、収集できる情報に限界があったが、柴巻習俗が存在していたことが確認された。伊豆大島ではツバキによる喫煙習俗はなかった。また、ほとんどの地域ではツバキの葉を使用していたが、本宮町の集落一帯では、ツバキではなくカシの葉にきざみを使用していた。

以上の聞き取りおよび文献調査より、柴巻の習俗が確認された場所について視覚的に把握するため集落および峠などの地点45地点51情報をマップ上に整理した。柴巻習俗の伝播は、紀伊半島では熊野灘沿岸を伝ってのつながりが考えられ、長崎県へはおそらく捕鯨や漁業者により伝えられた。淡路島東南部も、熊野灘から紀伊水道に至る漁業でのつながりと考えられた。熊野山間部については、熊野川、古座川、日置川が紀伊山地の奥地から熊野灘に向かって流れており、山間の集落間は峠を越えて山道や古い街道でつながっていた。柴巻の習俗はこれらの「流通の道」で伝ったと分析された。

嗜好品について調査を行った結果、特徴的なことは発酵したすしや茶、芋など日常食と同じ食材が、厳しい労働を潤す嗜好品の役割を果たしていた。自給自足の限られた食材の中で、日常の嗜好品は日常食の延長にあった。こうした中で、柴巻は突出した嗜好品であった。辺鄙な環境の中で、過酷な労働に明け暮れた女性たちは柴巻に強い嗜好と依存性を持っていたのではないかと考えられた。柴巻は生活に馴染む嗜好品として、厳しい暮らしの中での愉しみの位置を確保していたのである。

柴巻をはじめ地域の素朴な資源を活用した嗜好品は、過激な労働が姿を消し、金銭による消費行動が主流となっていく時代背景の中で生き残らなかった。